令和２年度　第４回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会　会議録

日　時：令和３年３月１日（月）18：00～19：30
会　場：練馬区立区民・産業プラザ　研修室１

１．事務局挨拶

コロナ禍において緊急事態宣言も続いている中、本日は 19 時半までと変更しての開催となった。時間に限りはあるが、各チームの取り組みを報告させていただいた後、委員の皆様とキーパーソン等について忌憚のない意見交換ができればと期待している。

２．配布資料確認

３．練馬区地域福祉計画の進捗状況報告

委　　員：地域福祉計画は令和２年度から６年度の５か年計画で、今年度からスタートしている。本日はその中から３点紹介する。①施策「区民との協働と地域の支え合いを推進する」において、つながるカレッジねりまという事業がある。講座の外に体験等を通して地域福祉を担う人材育成を目的とするものだが、コロナの影響もあり施設見学や体験ができない中で１月からはリモートで授業を実施している。受講開始後すぐに先輩たちとのつながりを通して地域で活動する方もいる。②施策「福祉サービスを利用しやすい環境をつくる」における、生活困窮者対策については今年度当初より生活相談コールセンターを立ち上げ、住居確保給付金や特例貸付に関する相談等を社協と一緒に運営してきた。これまで延べ 15,500 件の相談を受けている。また、練馬区独自事業として生活再建支援給付金の給付を実施している。区が委託している生活サポートセンターの相談においても多くの相談が寄せられており、生活相談や住居確保給付金、就労支援、家計相談、債務整理に関すること等の相談を通して自立支援を行っている。現在、西庁舎に窓口があるが外国籍の方も多く来所されている。過去３年間の相談件数は１万件前後だが、今年度は１月時点で１万３千件に至っており、次年度はさらに増加が見込まれるため相談員を３名増員して 12 名で対応する予定である。③施策「権利擁護が必要な方への支援体制を整備する」における、成年後見制度を利用する際の支援について、区は今年度より制度利用の中核機関を社協に委託し、制度の相談支援、関係者のネットワークの構築、周知・啓発等を行っている。特に身近な地域で関係者が連携して支援体制を構築するために、区の東地区・西地区で検討支援会議を行っている。今年度はコロナ禍の中、それぞれの地区ですでに４回ずつ開催した。法人後見の実施に向けて、具体的な関係機関との調整や市民後見人の養成など後見人の担い手を増やす取り組みも行っている。相談件数は昨年 12 月末時点で前年度比 43%増。地域福祉権利擁護事業利用者も昨年 12 月末時点で前年度比 46%増。成年後見制度に対する潜在的ニーズも大変多いと実感している。このニーズに対応できるよう成年後見制度や地域福祉権利擁護事業の一層の利用促進に取り組んでいきたい。
３点紹介したが、他事業においてはコロナ禍において中止にしたものもあった。次年度も先行きは不透明な部分もあるが工夫しながら計画を進めていきたい。

委　　員：生活サポートセンターは今非常に窓口や職員の場所が狭いと思うが、今後広い場所に移動をする等の対応ができるか。

委　　員：次年度より同じ西庁舎３階でスペース拡大をする予定である。

４．第５次地域福祉活動計画策定推進評価チームの取り組み　【資料１】

①ネリーズ通信（チームの取り組み資料、ネリーズ通信 18 号案をもとに報告）

ネリーズかるたの原稿について、次回は委員にお願いしたい。

委　　員：分かりました。

②懇談会（チームの取り組み資料を基に報告）

今回のオンライン懇談会は、通常の懇談会より男性の参加が多い印象だった。コロナ禍での活動の工夫や気づいたこと、町会の話等をした。「アフターコロナを想定して活動していきたい」、「画面上とは言え顔を見て話が出来て良かった」、「やはり対面で顔を見て話がしたい」等の感想が聞かれた。14 名の参加者と職員で行ったが 3 つのグループに分かれて話をした。

委　　員：操作についていくのが精一杯だったが、慣れるようにやっていくしかないとも感じた。

委　　員：参加者の話からコロナ禍での苦労やその中でも努力をされている様子が分かった。自分自身も本当は会場でお話をしたい気持ちもあるが、慣れるためにもオンラインでやっている。

③ホームページ（チームの取り組み資料を基に報告）

委　　員：まだ話し合いの機会は持てていないが、今後は動画配信が重要だと思っている。協働推進課で大きな動画配信の活動があったので、そういったところと連携していくことも良いのではないか。

委　　員：動画配信は重要だが、編集に負担が大きく時間がかかることもある。技術的なサポート等ができると良い。

④キーパーソン事例（チームの取り組み資料を基に報告）

⑤評価（チームの取り組み資料を基に報告）

担当職員は委員からの意見を道標にしながら悩みつつ話し合っている段階である。

→質問なし

５．意見交換（キーパーソンについて）

職　　員：前回の策定委員会を経て推進部会や事例チームで話し合いを重ねてきた。副委員長、委員の方からキーパーソンに関して話をいただき意見交換を始めたい。

職　　員：前回の策定委員会で、委員から人は目の前の溺れている人に浮き輪を投げるものだから安心して良いと言われてなるほどと感じた。一方最後の方に大勢の人が溺れていたらどうすれば良いかと投げかけてくれた委員もいらっしゃり、どのように誰から浮き輪をなげるか、どのように船を出すか等、そういったことをシステム的にやろうとするのが、ネリーズやキーパーソンと名付けたり、地域福祉コーディネーターの役割を理解し地域福祉を推進しようとするこの地域福祉活動計画なのではないかと事例チームで再確認した。前回の策定委員会の委員の問いかけに応えることができず後悔していたので、意見交換の前振りとして話をした。

副委員長：自分がこの福祉の世界に入ったのは、当事者の人が自分を突き動かしたからだった。自分にとっては自分を突き動かした人がキーパーソンとなるという事を事例チームで話した。

当会のメンバーで 60 代女性、統合失調症の方が大腸がんを患った。本人は一人暮らしをしており、自宅アパートで最期を迎えることを決断した。訪問看護やヘルパーが支援し、私たちは休みの日に会いに行っていたが、病気の進行とともに不安が強くなり、私たちにもそばにいて欲しいと希望するようになった。仕事外の対応ではあったが彼女の気持ちを受け止め寄り添っていた。狭い居室で物があふれている様子を見て、支援のためにも環境整備をする必要があると感じていた。当初は本人が拒否していたが、訪問看護の方と話し合いながら眠りに深く入る時期に機会を見て居室の片付けをした。以前からつながりがあった清掃事務所に相談して年末の 29 日に制度外で大量に出たごみを持って行ってもらった。部屋がすっきりして褥瘡予防のエアマットも入れることができた。これまで寄り添うことしかできなかったが環境を整備したことで私たちと訪問看護、ヘルパー等の関係が深まり、彼女を看取る気持ちを一つにして支える態勢ができた。年末年始も支援に入りながら１/26 に亡くなった。彼女は最後まで生きることに一生懸命であった。

体格の良い人で点滴もせず２か月水分だけで生きて、薬でコントロールしながら痛みもなく静かに最期を迎えた。彼女の生き方死に方に清々しいような思い、感銘を受けた。他の人にも彼女の生き方を伝えたいと思って事例チームでも話をした。彼女自身が訪問看護やヘルパー、福祉事務所、包括や私たち、色々な人達を動かした、また動かされた人が横でつながり最期の看取りまで行った。この時にキーパーソンは誰だろうと考えると彼女だと思った。

委　　員：これまで策定委員会等でも活動計画の 16P に示したようなネリーズとキーパーソン、地域福祉コーディネーターのトライアングルの図について話をしていた。この図では私たちのような関わる側の関係を示しているが、そもそも副委員長が看取られたような方がいないとあり得ないものである。私たちが存在する理由は、きっかけになる当事者がいて初めて成り立つものであると考えると、当事者こそがキーパーソンと言えるということを話していただいた。キーパーソンや支援者が必要とされる理由、前提が視点として抜けていたのではないかとチームで確認した。今後キーパーソンとはという意見交換をしていくと思うが、自分にとっては関わっている子どもがそれにあたるし、副委員長にとっては事例で出てきたような人が私たちを動かす本当のキーパーソンであるという大前提を忘れずに進めて行けると良い。石神井協議体でも様々な情報交換を行っているが、地域のキーパーソン同士のつながりができていると感じている。どのように評価していくのかは難しく数年単位で見る必要があると思うが、私たちにきっかけをくれた人達、当事者が主体であるという視点を忘れてはいけない。

委　　員：今までは支援する側の中でキーパーソンを見出そうとしていたが、今の話だときっかけとなる人がキーパーソンではないかということか。

職　　員：キーパーソンときっかけを作る人はセットで考えていきたい。その人を見出した副委員長の感性がまずあり、その人に突き動かされたという話を私たちにしてもらえたことで、私たちもまた突き動かされるものがある。事例チームの中で副委員長が事例を伝え委員がそれをロジカルに捉え、皆で確認できたことがあったため、意見交換の前に伝えると話しやすくなると考えた。

職　　員：事例チームでの話し合いや推進部会、部署でも他の職員と話を重ねている。キーパーソンが役割を果たしていくためには、私たち社協職員が地域福祉コーディネーターとして地域住民の声や地域に見えるもの、見えないものも含めて気づく感覚を持つことが必要だとこの話し合いを通して学んでいる。

委　　員：事例の中で訪問看護や清掃事務所がインフォーマルな動きをしていることを捉えると、そのインフォーマルなサポートを引き出す関係を作ったのはやはり副委員長だった思う。キーパーソンの定義を限定的に考える必要はないのだろうと思った。システム的な話で、例えばコロナの治療の際にもトリアージをするように、困った人を助ける時の優先順位をつける必要があるということを言っているのではない。事例の中で訪問看護という制度があったことで役割分担ができたように、前提となる制度をどう考えるかという趣旨で前回の策定委員会では発言していたと思う。コロナ禍で様々な制度が破綻寸前の状況にある。生活に関する相談が急増しているという事を聞くと、やはり前提となる制度が脆弱なのではないか。個々のケースの中で誰かをキーパーソンと命名する必要はないが、しかし誰かがその機能を果たしていく必要はある、そこを支える制度が脆弱なのではないかと考えている。キーパーソンとしての機能は個々の状況で変わってくるが、柔軟に動ける仕組みが必要だと感じた。生活を支える基盤となる制度についての議論をしていかないと、相互の助け合いだけに頼るのは発展性に乏しいのではないかと考えている。

委　　員：キーパーソンについて何となくもやもやする理由は英語だからではないか。「きっかけを作る人」など日本語で分かりやすく表現できると良いのではないか。

委　　員：「きっかけを作る人」はその時の状況や立場によって違ってくる。この人に誰が一番寄り添えるのか、一番よく知っている人は誰なのか、ということをキーパーソンについて考える時に視点とし

て持っていると良いのではないか。

委　　員：ネリーズ通信のバスの話、こういったことをネリーズからたくさん発信していけると良い。バスの優先席という制度があり、一定数の中ではその制度で完結してしまうが、バスが満員になった時等、色々な状況の中で優先席という制度だけでは解決しない状況になり得る。その時に優先席という制度と席を譲りたいという気持ちが地域の中にあって日々が送られている。優先席をただ増やせばよいということだけでなく、譲りたいという気持ちを大事にしていけると良い。その出来事によって自分自身が嬉しい気持ちになり、発信につながっていく。ネリーズ通信の目的は「ネリーズの気づきの輪を広げ発信力を高める」だが、第４次計画から「気づき育ちあう」という視点が根付いているのがこの計画だと思っている。キーパーソンの話をする中でネリーズの気づきが育ちあいにつながっていくということを見出していけると良いと思う。今やっているように事例の中から探していくことが大事ではないか。

委　　員：大勢の人が溺れている時はどうするか、浮き輪や船をたくさん出すことだが、そのためには組織、船団が必要となる。その組織がまさに社会福祉協議会である。コロナ禍で先は見えないが、今だからこそキーパーソンが出やすい環境になっているとも言える。地域の様々な困難に住民が気づきやすい環境にあるのが今である。多くの浮き輪を投げるための仕組み、組織はすでにある、今こそ命を吹き込む時期だと感じている。

委　　員：連携し交わるということが大事だと思う。私のグループは自助グループなので当事者が支援者になっていくのだが、それぞれの人が力を持っていることを信じ、その力を引き出すことが大事だと考えている。様々な場面で「共有する」ことが喜びになり力につながっていく。その人自身の喜びを頼りにグループが運営できており、「奉仕」とは違う。副委員長の話を聞いて、当事者も立ち上がって気づき、共有する中でキーパーソンになっていくと感じた。

委　　員：キーパーソンの形について３つ考えられる。一つはそばで支援をする人、二つ目は当事者であり支援者である人、三つめは代弁する人。困っている人が助けてと言える人なら良いが、言えない人に気が付いてくれる人、代弁する人も必要ではないか。定義することに疑問もあるが、いくつかのタイプのキーパーソンがいると考えると良いのではないか。また、この話し合いの目的はどこにあるのか確認しておきたい。地域住民にキーパーソンと伝えモチベーションを上げる、やる気を出してもらえると良いということか、地域福祉コーディネーターが地域で連携する際に考える視点について話をしているのか、分からない部分がある。

委　　員：キーパーソンは場面によって変わってくるものと考えると、誰かをキーパーソンと命名しようとしているものではないだろう。

職　　員：キーパーソンの機能があると気づいて活動計画を作ったが、もう少しキーパーソンとは何か、イメージの理解を皆さんと一緒に深めたいと思って投げかけている。前回の４次計画の際もネリーズについて委員の皆さんとワークショップをしたように、推進の１年目として皆さんと意見交換をする場を作らせてもらった。

委　　員：キーパーソンは田舎で言うところの世話人という意味ではないか。

委　　員：私たちの事業所では英語を極力さけるようにしている。世話人も良いが、もう少し柔らかい簡単な日本語で表現できると良い。

委　　員：２点話をしたい。①副委員長の話は良い事例だった。ソーシャルワーク等福祉の学術的な分野では、キーパーソンは問題解決の手掛かりとなる可能性のある人と表現されているが、何を指しているのか分かりづらい。今日それぞれの人が自分の言葉で語ったことが非常に大事で、こういう事例の時のこういう人をキーパーソンとして捉える、という話をすることこそが重要ではないか。今日の事例においては、制度や仕組みだけでは問題解決しない、解決のためには人がどう動くか、それぞれの立場の人がどのように他の人と関わるかが大事であるということが端的に分かる事例

だった。こういう事例とともにキーパーソンをどう捉えるかの議論を深められると良い。②浮き輪がたくさん必要な時はどうするのかということについて話したい。地域福祉分野においてよく個別支援を地域支援にという言い方をする。個別に困っている人がいる場合に地域には他にも同じように困っている人がいるはずなので、どのように地域で支援をしていくかを考える事、その視点は非常に大事であるが、ともすると専門職主導になりやすい、また社協が行政に制度の充実を働きかけるということもあるが、住民不在に陥りやすい。一番のニーズを持っているのは住民であるということを認識し、住民主体の視点に変えていくことが大事だと考える。今日のような議論を積み重ねていく事が今期の計画で非常に重要だと感じた。

委　　員：キーパーソンは誰でもなりえると思う。問題が発生した時にそれを見つけて、解決に向けて動き出す人がキーパーソンになると思う。定義づけは必要ないと思うが、私たち民生委員もそうだが、ネリーズも含め目的意識を持っていると思う。そういった目的意識があり、解決に向けて動き出す人と私自身は理解している。

委　　員：キーパーソンについては問題解決に結びつける人として捉えると理解がしやすいと感じる。計画にキーパーソンと書かれていると、一般区民にとっては分かり辛さがあると思うので、どのように伝えていくか、意見を交わしながら工夫できると良い。

６．まとめ

副委員長：当事者が誰でもキーパーソンと言おうとしているわけではない。今回の事例で言うと、本人の生きる姿勢、意思を持つこと、助けて欲しいということを明確にする、というようなその人の力があり、だからこそ私たちも動かされた。その方に人を動かす力があると感じる。この関わりを通して、訪問看護という地域の中でガン末期患者のために働いている人がいることを初めて知ることができた。一人暮らしだったという事もあったと思うが、彼女が地域の中でたくさんの人に見守られ、お互いに幸せに感じながら看取ることができた。これは誰にも当てはまるものではなく、キーになるには自分で決めて助けを求める事ができるということが大事だと感じた。

委 員 長：今回は明星副委員長から事例を出してもらったことで具体的な話をすることができた。今後も事例の共有を重ねていき、説明できるような形になっていけると良い。

７．その他

８．次回の日程について

日時：令和３年６月 24 日（木）18：30～

場所：Coconeri 研修室１

以　上